

部落問題のうちと

9

戦火をのりこえて



カットも筆者

北川銭夫

戦争のまつた中である。

私はどうしていたかといえば、前半は新たに実施された戦時統制法の「映画法」で、映画人の職能を守る組織の全日本映画人連盟の関西事務局長をやつていた。後半は、この連盟が戦時解散したので、海をわたって満州国の半官半民組織である「満州映画協会」に入社、赤い夕陽と高粱畑をみてくらした。

ここで敗戦、満州国が解体する混乱の中を、私は一九四六（昭二一）年八月十七日、日本國へ帰り、一まず妻の実家の京都へおちついた。この私の戦争期間には、もちろん書くことが多い。書きようでは、それだけ一冊の本になるだろう。しかし、本稿がそもそも私と部落問題というのが中心のテーマなので、この戦争期間では部落問題の関係はほとんど皆無にちかい内容である。それで私は思い切って、この部分を切り捨て、若干の問題にふれるだけに止めた。

一つは二回にわたる日本人映画人の満映参加である。第一回は、一九三八（昭一三）年のときは、当時の日本映画界で名作をつぎつぎと世に送っていた日活の製作のリーダーである根岸寛一、マキノ満男らが併

かなりの映画技術者が第二次満映入社となつたのである。私はそれら渡満希望者を映画人連盟の事務局長だというのでまとめる立場から世話をしていたが、君も一緒に行かぬかということになり、映画人連盟も解散するし、外国生活もよからうと満映へ入社することになつた。

私は映画技術者ではないので、満映は私をどんなボジションにつけるかと思っていたら、映画人養成所の主事ということになつた。なるほど私は映画理論や映画史のことは一通り専門的に知っているし、これなら養成所で生徒に講義はできる。主事ということで私の上役には所長がいたが、これは製作局の中心なので、所長は形式的で、私がほとんど管理と運営を任せられた形だった。ここでは中国人の技術者を養成するのが目標で、日本人や朝鮮人の青年も少数だがいた。満映は敗戦とともに消え去るのだが、その機材と施設、そして若干の中国人技術者——まだ幼稚ではあつたが——は残つた。第一回の卒業生の中には、のちに毛沢東専門のカメラマンとなつた馬守清もその一人であつた。また、日中外交が正常化して文化交流が行われた行事の一つに京劇の名優が来日したとき、私も大阪での歓迎会に出席したら、その一行の一人から呼びとめられた。見ると、これは眼の碧い中国人で李某という養成所出

身のカメラマン。彼は中国人とロシア人との混血児で眼が碧いので、私はよく覚えていた。彼はこの訪日芸能人一行に随行しているカメラマンであった。彼との話で、養成所出身の技術者たちがりっぱに第一線で活躍しているとのことで、私には大へんうれしかった。

養成所は毎年秋になると、生徒募集である。入所資格は中学校卒ということなので、所としては、毎秋所長か主事がめぼしい中学へ勧誘に全国を旅して、入所者をかためてゆく。私もこの勧誘旅行を二度ばかりやつたが、土地不案内に言葉も通じにくいう障害もあつたが、結構この旅はたのしかつた。独りで行くのだから、万事が自分のやり放題である。官費で負担もかからない。この旅のおかげで私はあちこちの都市を歩いて廻つた。今も記憶にのこるのは、熱河省の承德。この西太后の離宮やいくつかのラマ教寺院が美しく山河を彩っている美しさはすばらしい。私はスベン・ヘデインの『熱河』一冊を手に、街中が一つの結構をつくした大庭園のような承德の街を歩いた。中学の校長から、熱河は中共系の遊撃隊の活躍地帯で、街を歩くのも十分注意してほしいといわれていたが、街の美しさにひかれていつか危険のほども忘れ、ラマ僧のアパートみたいな大建物をただ独り、エツチラオツチラ歩いて上つた。そのとき私の感動したのは、手に

甘粕正彦の自殺真説

したヘデインの『熱河』の文章であつた。彼の書いた一行、一行は、まるでその歩いているところをすぐペンにしていると思うほど、緻密で正確で、生々としていた。これは日本型のボカシとは全くちがう美の感覚である。こんな旅をしながら、無事満映へもどつて、何人かの養成所入所希望を報告していたのである。そして一九四五年八月にソ連軍の満州国進出となつたのである。実質的な「満州国」は、機能を停止したといつてよいだろう。

日本國の敗戦、滿州國の消失という一つの歴史的な変化はまだ明瞭にされてはいない。シベリヤへ日本軍兵士が大量に抑留された問題一つをとっても、最近のロシアの政変とからんでやっと口が開けてきたといったように、多くの人々のことが土足でふみにじられるよう消え去つて行くのだろう。悪名か善名かは知らぬが、とにかく一さわがせした人や事件で、どうやら歴史の片隅にのこされそうのは、幸いとしなければならぬ。

の甘粕自殺の報道が實際になされたことを確かめてないのので、案外私の記者会見が第一号かも知れぬ。

十七日であつた。もつと厳密にいうと二泊三日間の船旅で、日本國の博多港へ上陸したのが八月十日で、ここではじめてはつきりと日本の土を踏み、米兵と日本の女性がうでを組んでヘラヘラと白昼歩いているのを見たのである。驚いたのは、私たち旧満映の引き揚げが「映画人帰国第一号」ということで、ジャーナリストがどつと押しかけてきたことである。裏方と家族という人たちばかりなので、やむなく私が代表して応待した。記者たちには当外れでお気の毒であつたが、そこで驚いたのは、甘粕正彦理事長がピストル自殺したという。私はそれはまちがいで、甘粕は理事長室で青酸カリであつたことを明らかにした。これは、甘粕正彦という正体不明な存在が、ピストル自殺をしたという、いかにも甘粕らしい死をくつがえし、青酸カリという小さな形に矮小化したことで記者たちはガッカリしたらしいが、私自身も連絡があつて理事長室へ行き、まちがいなく青酸カリ自殺の姿を目撃したから、曲げようもない事実であつた。ただ、甘粕はソ連進入のあと、日本人社員を全員集めて、その前で自分は自殺すると公言したことは私もその中にいたからまちがいはない。ただ敗戦前後の混乱した中で、甘粕自殺という報道がとにかくにもどこかの誰かによつてなされていたことも事実のようだ。ただ私は誤つたまま

の甘粕自殺の報道が實際になされたことを確かめてないの、案外私の記者会見が第一号かも知れぬ。

この「甘粕自殺」はこちらがもつてている情報だが、「原爆投下」はどうだろうかと、ふと思つた。私は正直にいって、何も知らなかつた。おそらく私と行を伴にした引き揚げ日本人も同様に知らなかつたろうと思う。私は八月十六日の白昼に山陽線を京都へ向けて走る引き揚げ者の一人であつた。つぎつぎに赤ちゃけた感じの色彩につつまれた被災地を通り過ぎたし、ヒロシマ駅では停車もしている。原爆投下一年後のヒロシマは、私にはひどく破壊され、赤銅色一色のような記憶がボンヤリのこつていて、その後私が戦後の広島を最初に訪れたのは、映画「原爆の子」の上映のことである。そして私が歩いて自分の眼でたしかめた戦後のヒロシマは、被爆の面影は表面的にはうすれていた。ただ驚いたのは、その夜、旅館で夕刊をみると、私が昼前後に通つた広島駅近くの猿猴橋でヤクザのいざこざがあり、ピストルが射たれていたことである。もし私の通つたのがおそれれば、どんな目にあつてゐるか判らないわけで、ゾツとした。翌日、劇場の支配人との話の中で、そのことを話すと、支配人は、とにかくヤクザの進出はすごいですよ、一つちがえば一発パーンですかね、注

意して下さいとのことであった。

朝田善之助との出会い

京都は被爆の経験がほとんどない。私が家族とともに一人も欠けずに、戦災列車で京都駅に降りた印象も、戦前私が生活の中で見なれてきた、余り風体のあがらぬ京都駅であった。そして私は今でもその当時の京都の印象がそつくりそのまま続いている。実際に見える。私は帰つて早々は、とにかく私の旧知たちを訪ねて帰国のあいさつをし、傍らしごとの口を頼むことで明けくれた。京都の古い町々を歩いたが、戦前のままの風情がのこっているところが多かった。戦後の京都が革新府・市政をつくりだし、一方で国会から市町村の自治体にいたるまで、多くの革新議員をおくりだしているのも、この京の変らぬ古さが一つの力になつてゐるのではないか。

こんな理屈はこれくらいにするが、こういう京都の古さが一定の見識となつて京都市民中に居すわつていふことはたしかである。

私が満州から京都へかえってきて、まず腰をおろしたのは、左京区の象徴のような顔をした京都大学の北

員であった。いざれにせよ朝田と正式に知りあつたのは、この時が初めてである。そして、翌年の地方選挙で朝田は左京区の共産党の正式候補となり、地方選挙をたたかつたのである。私もビラの街頭張りや応援弁士で応援した。当時の応援弁士は、若い運動員の自転車のお尻にしがみついてつぎの会場へという全くの手弁当型であった。この選挙、安井は一位当選であつたが、朝田は落選した。朝田には地域での浮動票がほとんど入らない。また、本来朝田の基礎票田である田中の部落が大変な乱戦。朝田の他に保守系から二人、さらには社会党、労農党、無所属と出馬している。労農党はいまは無いが、もともと容共革新の小政党である。田中から立候補した人は、どうみても革新系とはいえない人物。ところが立候補者がたくさんいて、もう名乗る政党といえば労農党しかない。それでやむなく労農党へ申し入れ、候補者を出さない労農党はまあから、市議戦の方はしっかりと地盤をもつた安井信雄が予想以上に票を集め第一位で当選であつたのに、府議の朝田の方は落選であつた。

その後朝田とは、私が六〇年安保のころ、しごとの関係で東京へ移住するまでつづいた。別に組織として

直接には関係がないから、任意なものであつたが、朝田の周囲では戦前から市役所の民生局関係のメンバーがブレーン・トラストのような形で朝田にくつついていた。その中では、民生局の主査である中川忠次が中心で、朝田の思想形成にはこのグループの影響が大きかった。中川忠次は京大のドイツ文学出身で、荒木次郎が中川だといえばああそうかという人もいよう。その中川は私もよく知っていたが、戦後の京都でわき上るよう職場からわき起つた文化活動熱を二人でまとめるに至った。そして、京都勤労者文化連盟といふ組織をつくり、その活動費の財源は市の予算から中川らがひねりだした。当初から財源がたしかな組織の運営は楽である。中川が市職から出た形で議長、私が「全新聞」から出た形で副議長ということで連盟はうごき出して、四七年の秋には全市の労働組織やサークルで、さまざまな分野のコンクール、発表会、展示会などをひらいた。朝田と私がつつきあつた中で、副産物のようにしてつくりだされ、成果をあげたのは勤文連である。そうしたことが可能な雰囲気が敗戦直後の日本にいたるところにかもし出されていいたことも、勤文連成立の大きな原因であろう。敗戦でも一度顔を洗い直した日本の勤労者がつくりだした、きわめてすなおな民主主義の姿である。

に百万遍という大きな寺がある。この百万遍を通りぬけあたりに安井病院という共産党員が院長をしている大きな病院がある。ここ初代院長の安井信雄は、マルクス経済学の開拓者の一人である河上肇などの主治医であった人だが、左京区という山深い地域をかかえた一帯を長年の医療活動で開拓した力で、戦後の最初の市議選に立候補しみごと第一位で当選して以来、ずっと落選したことがない。その安井病院をとりまいた形のところに私の妻の実家が住んでいた。当初、この借家は私が満州へ行くまで住んでいた家である。私たち一家の渡満したあとで、この家は妻の実家が借りていた。そこへ一先ず私たちは腰を降ろした。妻の家にすれば迷惑な話だが、断りもできない。そんなことの帰国後の生活の巣はこの左京の一角となつた。あるいはまだ病室がなく診療所だけの医院であつたかも知れぬ。その安井医院の一室に数人集つて私の話を聞く会がもたれた。そのとき安井医師から朝田善之助を紹介された。そのころの朝田善之助はレッキとした共産党